

KYOKY 130

特集 京都教育大学東日本大震災復興支援活動報告

特集 大学会館改修・改築工事について



京都教育大学

<表紙>

『げんき』（納涼大会のあんどんの絵）

附属幼稚園 5歳児 安井綾花・鍋島優宏

納涼大会では、5歳児が二人で描いた絵をあんどんにして飾ることが伝統です。今年のテーマは「げんき」でした。

「あやちゃんとまーくんがシットウをうえてみずをあげたらね、すごくおおきくなったの。しゅうかくしてそれをふたりでたべたら、げんきになれるとおもうよ」

<裏表紙>

『星人形』

附属幼稚園 4歳児 吉田名亜里

七夕のお話を聞いて、星人形を作りました。

「はやくおとなになって、おりょうりがつくりたいな」とおねがいました。



CONTENTS



<表紙> 附属幼稚園 5歳児 安井 綾花・鍋島 優宏
<裏表紙> 附属幼稚園 4歳児 吉田 名亜里

特集

- 2 <京都教育大学東日本大震災復興支援活動報告>
被災地の声に耳をすませて学んだこと
—京都教育大学東日本大震災復興支援事業を終えて
教育学科准教授
岡部 美香
- 4 東日本大震災に伴うボランティア活動報告
大学院連合教職実践研究科 2年次
福村 萌
家庭領域専攻 3回生
國本 千明
- 6 <大学会館改修・改築工事について>
大学会館が改修・改築され
夢と希望のある空間に…
理事・副学長（教務・学生指導担当）
安東 茂樹

海外見聞録

- 8 オランダ小学校訪問記
京都教育大学附属桃山中学校教諭
津村 正樹
- 10 フィンランドの教育
～ヘルシンキ大学の附属学校を訪ねて
京都教育大学附属特別支援学校教頭
平岡 恵子

留学生の声

- 12 京都、めっちゃ好きやねん！
日本語・日本文化研修留学生
マグダレナ・ビェリンスカ
（ポーランド出身）

研究余滴

- 14 演奏家を育てる力
音楽科教授
饗場 知昭

京教今昔物語

- 15 京教大に育まれて
教育学科教授
水谷 宗行

京教学内探訪

- 17 木の実二題—イヌビワとマテバシイ
環境教育実践センター教授
岡本 正志

附属学校園だより

- 19 国際化・国際化教育
附属京都小中学校（中高等部）副校長
橋本 雅子
- 20 ロボカップ・ジュニア 2012メキシコ大会
—3年連続出場・3年連続入賞—
附属高等学校副校長
斉藤 正治
- 22 二つのワークショップ
附属特別支援学校副校長
高岸 正司

新任の先生から

- 23 体育学科講師
小山 宏之
- 23 国文学科准教授
天野 知幸
- 24 理学科准教授
今井 健介
- 24 子どもを中心に据えた幼保一体化に向けて
幼児教育科准教授
古賀 松香

卒業生の声

- 25 回り道のあと
京都教育大学附属特別支援学校高等部 講師
富田 紀子
- 25 笑顔を忘れずに
亀岡市立千代川小学校 教諭
濱田 薫

ようこそ大先輩

- 26 花と緑の美しい学園への提言
京都教育大学名誉教授
田淵 春三

読者の皆さまへ・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
細川 友秀

被災地の声に耳をすませて学んだこと —京都教育大学東日本大震災復興支援事業を終えて

教育学科准教授 岡部 美香

去る8月19日（日）、京都市呉竹文化センターで、京都教育大学東日本大震災復興支援事業「耳をすませば ～震災後に京都で何ができるかを考える～」を開催しました。

私たちに何かできることはないのだろうか？

事の始まりは、今年4月に編入してきた1人の学生から相談を受けたことでした。福島県に住んでいたというその学生は、福島県から避難してきた人びと、とりわけ子どもたちを支援するボランティアがしたいと希望していました。ところが、調べてみると、京都では、そうしたボランティア活動が昨年ほど活発には行われていないことがわかってきたというのです。

京都に住む私たちにいま何かできることはないのだろうか。そう話し合っていたとき、偶然、1つの新聞記事が目にとまりました。そこには、福島県の高校生が演劇を通して被災地に生きる子どもたちの現状を訴えている、と報じられていました。

この演劇を観てみたいね、できれば京都で上演してもらいたいね——この思いに賛同する学生たちが学生団体「F-Project ～耳をすませば～」を立ち上げました。続いて、この学生団体を支援する本学教員によって「京都教育大学東日本大震災復興支援事業『今 伝えたいこと（仮）』上演実行委員会」が組織され、他にもたくさんの教職員、同窓会のみなさま、学外のみなさまのご協力によって、この事業は実現しました。



当事者の声に真摯に耳を傾ける

第1部では、東日本大震災および東京電力福島第1原子力発電所事故の被災地・福島県相馬市から福島県立相馬高校・放送局の生徒さん9名と顧問の先生をお招きし、演劇「今 伝えたいこと（仮）」を上演していただきました。震災から1年が過ぎた福島県の高校を舞台に、1人の女子生徒の自殺からあらわになる高校生の心の奥に潜む怒りや悲しみ。これを主題として、放送局の生徒さんの1人がシナリオを書き下ろしました。字数の関係上、ここで詳しく内容を述べることはできませんので、朝日新聞デジタル掲載の記事をぜひご覧ください(<http://www.asahi.com/showbiz/stage/spotlight/OSK201208310042.html>)。

この演劇のなかでは、自殺した女子生徒の友人が観客に向けて次のように訴えます。「お願いします。私たちの声を聞いてください。子どもの訴えを無視しないでください。」演劇を観に来てくださっていた福島県からの避難者の方は、「大人も同じ想いを抱いています」とお話ししてくださいました。避難者が語り出すと黙り込んでしまう人や「復興支援はこうあるべきだ」と自分の考えを滔々^{とうとう}と語る人に出会うことは多いようですが、避難者の話をきちんと聞いてくれる人に出会うことはめったにないのだそうです。当事者一人ひとりの声に真摯に耳を傾けることが被災地の復興や避難者の生活を支援する上で一番大切なことなのだ、とあらためて私たちは学びました。



長期的な支援に向けて

第Ⅱ部では、まず、神戸松蔭女子学院大学の勝村弘也先生に、阪神・淡路大震災の経験を活かした東日本大震災の復興支援についてご講演いただきました。次に、本学学生が京都府・京都市で行われている震災ボランティアの現状と課題について報告しました。

勝村先生は、阪神・淡路大震災の被災地でいまま

に「借り上げ住宅問題」が起こっていることを話してくださいました。これは、借り上げ住宅の居住期間が数年後に迫り、特に高齢の被災者が住み替えを要求され困窮しているという問題です。被害規模のより大きい東日本大震災の被災地でも、今後、同じ問題がより切実に浮上ることが推測されます。勝村先生は、東北でも関西でも、互いに協力しながら、長期的な展望のもとに今後も復興支援をしていく必要がある、と強調されました。

長期的な支援に際して必要となるのは、私たちが「自己本位」の復興支援に陥らないようにすることです。本学学生による報告では、被災者が一人ひとり異なる名前と顔をもつかけがえない人間であることを忘れず、被災者と支援者としてではなく、一人の人間どうしとして出会い、対話をすることが、これからの支援でもっとも重要になるであろうことが指摘されました。

出会いから始まる

振り返れば、8月19日という1日だけでも、あなたかな出会いがたくさん生まれました。自分の学校にもぜひ相馬高校の演劇を紹介したいとおっしゃってくださった高校の先生。自分の集めた募金をすべて相馬高校に寄付したいと申し出てくださった京都市在住の女性。まずは耳をすませて被災地の声を聞いてみよう、そして京都で何ができるかを考えてみよう、という今回の事業の目的は、少しなりと達成できたのではないかと思います。

何より、相馬高校の生徒さんたちとの出会いは、本学の学生と教職員にとって大きな意味のあるものでした。「親身になって考えてくれる人たちがいて救われている。」「本当に楽しかった。京都から帰りたくない。」と笑顔で語ってくれた生徒さんたちの言葉に、私たちの方が救われたような気がします。本学学生との交流をきっかけに、学校教員になることを考え始めた生徒さんがいる、という嬉しいメールも後日、相馬高校の顧問の先生から届きました。相馬高校の演劇はこれから愛知と宮城で上演されることが決定しているそうですが、本学の学生・教職員から集められた募金はその活動資金にあてられるそうです。

こうして生まれた出会いの一つひとつを大切にしていけることが、これからの私たちには求められています。

東日本大震災に伴うボランティア活動報告(1)

大学院連合教職実践研究科 2年次 福村 萌

活動概要

宮城教育大学教育復興支援センターからの要請で、宮城県登米市立南方中学校の夏期学習会で学習支援活動に参加しました。8月6日～8日は京都教育大学生10名で学習支援、9日・10日は宮城教育大学生2名を含む12名で学習支援を行いました。活動時間は午前9時～午後3時まででした（休憩時間含む）。



感想

私は、昨年も東日本大震災に伴うボランティア活動に参加しましたが、昨年に比べ、今回参加した登米市は津波被害がなく、目立った建物の損傷も見受けられなかったため、最初は被災地という実感がわからないまま学習支援活動に入りました。

また、活動場所は学校ではなく、近くの公民館を借りての学習支援であり、午前中は先生方がクラブ活動の指導で不在であったため、生徒との関係が築きやすい環境であったと思います。生徒の学習意欲は高く、自分の課題に真剣に取り組んでいたため支援しやすかったと感じました。学習支援初日から、生徒と昼食を一緒に食べたり、休み時間にしゃべったりとコミュニケーションを多くとっていたので、5日間という短い期間でありましたが、信頼関係を築けたと思います。学校の先生方も優しく話しかけてくださったので大変楽しく過ごせました。

また、私たちの活動の様子を中学校のホームページに載せてくださり、思い出深い学習支援活動になりました。

最終日の午後から、宮城県名取市の閑上浜に見学に行きました。そこは津波被害ですべてが流されていました。平地がずっと続く地形であったため海岸から遠いところまで津波に襲われ、見渡す限りすべてのものが流されていました。近くの閑上中学校は津波被害のため、現在は使用されていませんでした。そこには震災時のまま止まった時計、津波で亡くなった生徒の名前が彫られた石碑、メッセージが書かれた机などがあり、震災の恐ろしさ・悲しさを改めて思い知る機会になりました。



津波被害にあった地域は今もなお、なにもない状態で、復興の兆しはありません。がれき処理など多くの問題が残っており、復興できる状況ではないのかもしれません。関西に住む私たちが学習支援に行く意味として、勉強を教える事に関しては関西人である意味はあまりないと思います。しかし、将来教壇に立つ者として、日本で起きたこの悲惨な出来事を忘れないように、震災を知らない世代に伝えることに意味があると思います。いま震災から1年半が経ち、関西に住む私たちは、震災の記憶や今も震災でつらい思いをしている人がいることを忘れていてはいませんか。震災の傷跡をテレビや写真で見ただけではなく、実際に東北に行き、自分の目で見てほしいと私は思います。

最後に、このようなボランティア活動の機会を与えてくださった宮城教育大学教育復興支援センターの方々、ボランティアを受け入れてくださった南方中学校の校長先生をはじめとする先生方、その他この1週間に関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

東日本大震災に伴うボランティア活動報告(2)

家庭領域専攻 3回生 國本千明

【活動概要】

8月6日から10日まで宮城県登米市立南方中学校の夏期学習の支援活動に参加しました。学習する場所は、南方中学校近くの公民館でした。午前中は3年生が各々で取り組みたい勉強や課題に取り組んでおり、私達はその学習の支援を行いました。午後は1年生、2年生、3年生が学年ごとに部屋を分かれて学習し、その支援を行いました。3年生は午前同様、自主性に任せた学習の支援で、1、2年生は主に、先生方から取り組み方等の指示があって、その指示に沿った学習の取り組みができるように支援しました。午前中は先生方がクラブ活動の指導等でお忙しいということで私達学生のみで支援を行いました。午後は各教科の先生方が1、2、3年生の部屋をローテーションしながら見回り、支援されていました。私達は、その日担当する学年や部屋を事前に決め、そこで学習支援を行いました。

【感想】

今回、このボランティアに参加できて、私は本当に良かったと思います。このボランティアに参加したから出会えた学生や先生方、そして生徒達には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ボランティアの日を迎えるまで、私は不安でいっぱいでした。しかし、共にボランティアに参加する学生や院生の皆さんがとても素敵な人達で、すぐに打ち解けることができました。ボランティア経験のある人もいて、とても心強かったです。また、ボランティア先の南方中学校の先生方は、私達をととても温かく迎えてくださいました。先生方から、震災当時の大変な状況の中で、みんなと力を合わせて頑張ってきた様子を聞かせていただき、心を強く打たれました。そんな先生方のご期待に応えられるよう、一生懸命ボランティア活動に取り組もうと決意しました。

そして、南方中学校の生徒達との対面。どの子達もとても素直で元気に挨拶をしてくれ、明るく話しかけてくれるので、とても可愛く思えて、こちらが逆に勇気もらった気持ちになりました。

学習支援に関しては、3年生は受験を控えているので意識がとても高く、初日から各自で真剣に勉強に励んでいました。しかし、1、2年生はそうでもなく、解らないところがあってもなかなか質問もしてくれな

い状況でした。私はこれではいけないと思い、生徒達と積極的に関わり、どんどん話しかけていきました。すると、生徒達も徐々に質問したり、話しかけてくれるようになって、日を追うごとに学習する姿勢がよくなっていきました。生徒達との距離を縮められた気がして、とてもうれしかったです。生徒達からの質問に時々頭を悩まされることもあり、もっと勉強しなければと思いました。生徒達の力になりたいと思う気持ちは参加したどの学生にもあり、反省会の姿勢やその後の自主的な学生同士での勉強会にととてもよく反映されていたと思います。

5日間というとても短い期間ではありましたが、そこでの出会いや、その人々から学んだり、考えさせられたりしたことは、私にとって一生大切にしていきたいと思える宝となりました。本当に、このボランティアに参加して良かったと強く思います。そしてまた、こういったボランティアに参加したいと思います。共にボランティアに参加した学生、院生の皆さん、宮城教育大学教育復興支援センターの方々、南方中学校の先生方、そして生徒達、本当にありがとうございました。



大学会館が改修・改築され夢と希望のある空間に…

理事・副学長（教務・学生指導担当） 安東 茂 樹

○豊かな環境での学びの空間・・・

全国の国立大学でも、大学の敷地における木々の緑の占有率が高い京都教育大学は、京都の伏見にある下町情緒の豊かな環境で、学生をはぐくむ守（モリ）の大学です。この数年、改修や改築が進み、学生の講義室・学習室や教員の研究室、学生や教職員が利用する大学会館、そしてラーニング・commonsを備えた図書館、などの施設設備の整備がなされてきました。その中でも、学生の皆さんにとって仲間とお茶を飲んだり語り合ったり、一人ゆっくり休憩したりする場所である大学会館が、より便利により綺麗に、この度、改修・改築されました。



写真1. 大学会館の全貌

○新しい大学会館の特長は・・・

全面改修・改築された大学会館と、その関連した場所を紹介します。

食堂（北棟）と大学会館（南棟）の間の正面入口を改築してワイドにし、食堂への入口の段差を無くするとともに、スペースを保つために最新のエレベータを外に突き出すように設置しました。これまで、食堂から大学会館へは、狭い渡り廊下を移動するため動きにくい状況でした。また、昼食時などの混雑する時間帯は食堂が混んでテーブルが不足し、座る場所を確保するのに苦労していました。そこで、食堂が混むときは移動して大学会館の喫茶や談話室でも食事できるように、渡り廊下の通路を広くし、仕切り部分に自動扉を設置しました。その結果、お盆（トレイ）に乗せた料理を両手で持って、スムーズに大学会館まで運べるようになりました。大学会館の1階のスペースを広くし、テーブルや椅子を新しい家具に取り揃えました。そこで、ゆっくり食事をすることもできるようになりました。同じく、2階の渡り廊下には、段差を解消し屋根

を付けて、雨の日でも濡れることなく移動できるようになりました。



写真2. 正面玄関



写真3. 玄関通路（自動扉とエレベータ）

食堂や購買部などがある北棟の3階にある共通演習室5室と和室を改修し、新たに空調設備を取り付けることによって、より綺麗で快適に使用できる場所となりました。



写真4. 共通演習室の空調設備

南棟の1階は、もと在った喫茶すばるの壁を撤去し、開放感豊かな広さを確保し、ゆったり談話したり食事したりできるスペースにしました。時には、必要に応じて間仕切りをし、集会や懇親会が開催できるなど臨機応変に対応して、多目的に利用できるスペースになりました。そして、省エネルギーの明るい照明装置や音楽の流れる音響設備を設置し、快適な環境として改修しました。皆さんの談話できるスペースが整備拡張され、テーブルや椅子は新しい家具を備え、いつまで

も大学の中で過ごしていただきたいような豊かな空間を作りました。学生の皆さんは、素晴らしい時期に遭遇し本当に幸せです。

本年度中には、中庭に面したところをウッドデッキにして、オープンカフェのような場所づくりを考えています。これまで、蚊の発生に悩み、その対策を考えてきました。そこで、できるだけ雑草が生えるのを防ぐため、中庭を雨が降っても水たまりができないインターロッキング舗装にするとともに、池の水を入れ替えて丁寧に清掃し、および周りの樹木の剪定をするなどして対応します。



写真5. 大学会館1階談話室（調理カウンター）



写真6. 大学会館1階談話室（壁設置テーブル）



写真7. 大学会館の談話室の全貌

南棟2階には、小集会室が5室有り、少人数のミーティングや控室等に利用できるように美しく改修しました。また、中集会室が1室有り、視聴覚機器やインターネットなどが使用できる装置を備え、多目的に利用できる居室として整備しました。

南棟の玄関は、段差の横にスロープを付け、1階には授乳やおむつ換え等のできるパウダー室も設置しました。車椅子で移動される方や乳児と一緒に来学された方に配慮して、使う人の立場になって改修・改築を



写真8. 小集会室

行いました。これらはその一端ですが、本学の施設や設備を、高齢者や障がいのある方にも使いやすいバリアフリーデザインから、乳児を抱いた方なども含めて、すべての方が使いやすいユニバーサルデザインを考慮したものへと改善に努めています。



写真9. 南玄関



写真10. パウダー室

○夢と希望がある大学会館・・・

私（著者）の高校の頃よく歌った曲の「学園広場（舟木一夫さん）」に、「ぼくが卒業してからも 忘れはしないよ いつまでも 学園広場は青春広場 夢と希望がある広場」のように、ここ大学会館はまさに「夢と希望がある」空間になると思います。物事を深く考えるとき、勉学で疲れたとき、友と話すとき、疲れてお茶するとき、お菓子を食するとき、悩みを相談するとき、夢を語るとき、一人で静かにいたいとき、・・・など、青春時代の思い出の広場として存在すると思います。

これは私から学生諸君にお願いですが、時には、青春を過ぎた熟年や高齢な教職員も仲間になって、一緒に語り合おうではありませんか、この夢と希望のある空間で・・・。

オランダ小学校訪問記

京都教育大学附属桃山中学校教諭 津村正樹

平成23年度より推進されている「教育実習スーパースクール化構想」に少し関わらせていただいている関係で、海外視察の機会を与えていただいた。行き先は、イギリスとオランダである。イギリスのオックスフォードでの小学校や中学校訪問も、貴重な体験で感動の連続であったが、紙面の関係と個人的な思いにより、オランダの学校訪問を選択させていただく。

最近、オランダの教育がマスコミに取り上げられるようになった。塾も宿題もない国の子供達が、世界の上位を誇る学力を有していることで脚光をあびている。この研修の出発前、NHKの番組でもオランダ教育のすばらしさを紹介されていた。その番組に出演されていたリヒテルズ直子氏は、オランダの教育を意欲的に日本に紹介する活動をされている。彼女の話を聞いて、さらに、オランダの教育に、興味がわいてきた。ところがなんと、今回の研修において、オランダでの滞在中の2日間も、私たちの通訳およびオランダ教育のすばらしさを講義していただく先生として、私たちに同行していただくことを知り、とても感激した。



車窓からの風景

さて、3月21日に、イギリス研修を終え、オランダに入国した。到着次の日は、早朝よりリヒテルズ直子氏を、ホテルに招いて、オランダ教育の基礎を講義していただき、昼からは、大学に教員養成のシステムの講義を受けにいった。今回の研修の目的は、海外の教員養成についての調査・研究であったが、その報告は、報告書がでておりそちらをお読みいただくことにして、平凡な中学校教員が見たオランダの小学校について、報告したい。

まず、リヒテルズ直子氏から聞いたオランダの教育を少し紹介したい。まず、学校を親や子供が自由に選べるのである。その学校の教育理念や方針などで、自由に学校を選択できるのである。100学校があれば、100のちがう教育があるということである。学区制もなく、教育費は、公立学校だけでなく私立学校においても無償である。それだけではない、近所に親が望

む教育と一致する学校が無い場合は、約200人の子供が集まることを証明できれば、市民団体でも政府から援助を受けて学校を設立できる。日本では考えられないことである。



4人1組の学習風景

さて、私たちの宿泊ホテルは、ハーグにあり、訪問させて頂く小学校は、ゴータという町にある。余談だが、ゴータチーズで有名なところだが、オランダで売られているチーズは、サッカーボール以上の大きさの固まりで売られていたのには驚いた。訪問校である小学校の校長先生からの要望で、「少し観て頂くよりは、1日共に生活して頂きたい。その方が、よりよく理解できる」ということで、生徒の登校とともに訪問させていただいた。早朝、ハーグのホテルをリヒテルズ氏とともに、タクシーで出発した。



リヒテルズ氏(左)を囲んで

タクシーの窓からは、風車や水門が見える。オランダらしい風景を楽しんでいると、いつしか閑静な住宅街に入ってきた。学校はどこかと、窓から周りを見渡すが学校らしき建物は見あたらなかった。「着きましたよ」という声で、目の前の建物が学校であるとわかったが、門もなければ塀もなく、平屋の建物であった。とうてい日本の学校をイメージしていたらわからない建物であった。ちょうど登校時間で、子供達が多く集まってきていたが、みんな親に付き添われて登校していた。自転車ロードが整備されており、親子仲良く自転車で行って来るのもオランダらしい。

訪問校は、Het Schateiland小学校というイエナプランに基づく教育を行っている小学校である。イエナプラン教育の大きな特徴は、学級が、日本のように学年別ではなく、異年齢の子供たちによって構成される。低学年(4歳~5歳)・中学年(小学1年生~3

年生)・高学年(4年生～6年生)の3つに分かれる。時間割は、自分で選択し、先生がそれに対してアドバイスをする。授業は、教科別学習だけではなく、『学ぶことを学ぶ』ために設けられた総合学習の時間を教育の中核としてなされている。

校舎の中にはいると、壁には子供たちや親たちが描いた動物や風景の絵があり、和やかな気持ちにさせてくれた。そして、自己紹介もそこそこで、教室に案内された。授業の合間に行われるサークルと呼ばれる活動中であった。このサークルもイエナプランの大きな特徴のひとつである。私が、案内されたのは高学年の教室で、子供たちは円になって座っていた。私たちのイスも用意されており、教室にはいると、「こんにちは」と日本語で挨拶をしてくれた。日本では小学校4年生から6年生に当たる子供たちがこの教室にいた。5年生の女の子が本日の担当で、昨日のテレビで見たニュースを説明し、自分の意見や感想を述べていた。発表が終わると、司会の女の子が、サークル内の子供たちに意見を聞く。すると、5、6人の手が挙がり、



異年齢による授業風景

指名された子が意見や感想を述べていった。まず、驚いたのは、みんな他の子供の意見や感想をよく聞いているということである。私語もなく、ふざけることもなかった。しかし、さらに驚いたことに、低学年のクラスを見ると同じように、サークルが行われていた。日本でいう幼稚園児の子供たちが、騒ぎもせず、自ら自分の席に着く。そして、他の意見を聞き、自分の意見も言う。私自身この様子を見て、本当に大きな衝撃を受けた。オランダの先生は言う「4歳児から論理的な力をつければ、協調性が身に付いてくる。サークルで普段から会話をすることで信頼感や思いやりの心が身に付いてくる」と。

さて、サークルが終わり、授業が始まるが、そこにチャイムは鳴らない。子供たち自らが、授業の準備にとりかかる。自分がやりたい勉強は、自分で考え、自分で授業を選ぶ。1週間の授業内容は、自分で選択するのだ。先生は、それにアドバイスをするだけ。だから、クラス一人一人の時間割がちがうのである。そのため、自分の選んだ授業の教室に自ら移動するのである。そして、教室には異年齢の子供たちが集まる。



週1回開かれる全校発表会

例えば、高学年のクラスならば、6年と5年と4年の子供がいる。一番下を経験したら、来年は真ん中に、そして6年生でリーダーを経験するのである、そして、一斉授業はほとんど無く、ほぼすべてが4人で組まれたグループ学習に終始する。何時間かあとに、クラスで発表し交流するのである。正直、このような授業で、学力が身に付くのかとってしまう。しかし、結果はでているのである。競争を重視する日本の教育と根本的にちがうのだ。では、教育に対する考え方で、何がちがうのか。私が思うに、オランダの教育は、ルールで縛り、競争で、力をつけさせようとしていない。そこにあるのは自己管理能力だ。自分の行動に責任を持たせるために、すべてオープンで教える。性についても、麻薬についても、隠さず教える。正しい知識を持ち、正しい選択ができる人間に育てるのがオランダの教育である。社会を構成する一員としての市民を育てることを徹底的に目指している。しかし、それでも、道を間違えれば、あとは自己責任である。たとえ子供とはいえ、責任をとらせるという。いじめがおこれば、徹底的に話し合いをする。それに対して、親も学校に全面協力をする。学校と保護者が一体となって子供を育てる。オランダには、モンスターペアレントはいないという。私が、今回、訪問させていただいた学校はイエナプランの学校であった。最初に書いたが、いろいろな方法や考え方の学校がある。しかし、このオランダの教育理念は、どの学校も変わらないという。日本の教育の先の先を走っているオランダの教育は、日本の教育の進むべき方向を示してくれているのではないだろうか。すべてをまねる必要はない。しかし、何かを変えなければ、日本の教育は限界に来ているのではないだろうか。そこにいいお手本があるのだから、取り入れる少しの勇気が有ればいいのではないだろうか。帰国後、夜のコンビニの前を通った。まぶしい光で照らされる入り口付近に中学生が数人座り込んでジュースの缶などを散らかして大声で楽しんでいる。その横を通り、コンビニに入っていく塾帰りの中学生。どちらも日本のごく普通の中学生の姿である。この光景は、10年前と変わっていない。

フィンランドの教育 ～ヘルシンキ大学の附属学校を訪ねて

京都教育大学附属特別支援学校教頭 平岡 恵子



昨年度末、本学の教育実習スーパースクール化構想海外研修に参加する機会を与えられました。渡航先は、オランダとフィンランドの2カ国。この海外見聞録ではpisa（OECD生徒の学習到達度調査）で上位の成績を取っているフィンランドの学校訪問のことと合間に行った観光地を紹介します。

1. オランダからフィンランドへ

オランダのイエナプラン教育小学校の視察を終え、フィンランドに向かいました。フィンランドといえば、「オーロラ」。極寒の地であるので、どのような服装をすればいいか渡航前に調べて準備をしました。飛行機の窓から見ると案の定、雪に埋もれた市街地。マイナス10度をいよいよ体験！と思いましたが、拍子抜けするくらい温かく、実際にはそんなことはないのですが、オランダの方が寒かったように感じました。結果的に準備してきた衣服も携帯カイロも使いませんでした。それから「オーロラ」を見る機会もありませんでした。

2. 学校訪問～ VTTS

(Vikki Teacher Training School)

1日目はヘルシンキ大学の教員養成のための附属学校を訪問しました。

入ったところは大きな吹き抜けとなっており、広いランチルームがすぐ横にありました。昼食はここで生徒たちと一緒にいただきましたが、フィンランドでは



授業料はもちろんのこと通学にかかる費用や食事も無料だということでした。（ちなみに私たちは5ユーロ支払いました）

校長先生の講義後は自由に参観できましたので、私は音楽の授業を見せていただくことにしました。ちょうど教育実習スーパースクール化構想にふさわしく、シベリウス音楽院の教育実習生2人が行っている授業を参観することができました。

フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」という曲で、フィンランドの伝統楽器のカンテレ（琴のように弦を指ではじく）を取り入れ、掛け声やボディパーカッションや歌を、6つのグループに分かれて順に演奏する組み立てでした。子どもたちはカンテレを足下に置いて、演奏する部分になるとカンテレを膝に置いて



て演奏していました。男性の実習生がリードし、女性の実習生はバイオリンで主旋律を演奏し、子ども達はとても熱心に実習生のリードで、カンテレを弾いたり、大きな声で歌ったりしていました。子ども達が生き生きと活動している授業でした。

この日（3月1日）は新しい大統領が就任された日で、小学校低学年の美術の授業ではユーチューブで大統領の就任演説の様子をスクリーンに映していました。フィンランドの記念すべき日だから、子どもたちにもその様子を見せています、との説明でした。

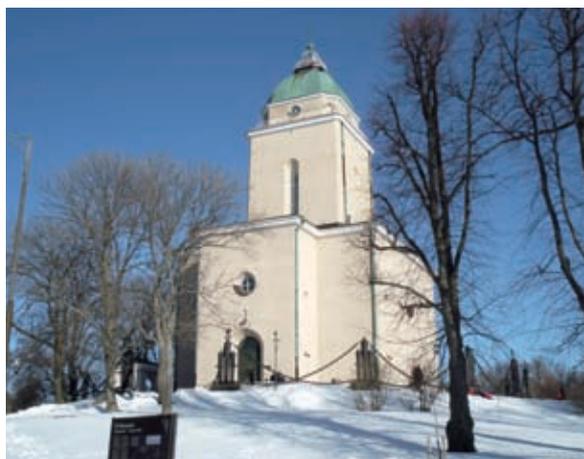
3. 食事・観光・買い物

フィンランドの2日目は重厚な雰囲気へのヘルシンキ大学附属中等学校の視察に行きました。授業参観し校長先生からフィンランドの教育についてのプレゼンを聞いたあと、急いで映画で有名になった「かもめ食堂」に行きました。映画とは店内の雰囲気が少し違いましたが、名物のシナモンロールを食べることができ、満足。

フィンランドといえば、ムーミン。ムーミン島はこの時期は閉鎖していましたが、ムーミンショップはいたるるところにあって、どこのショップでもいろいろな小物がいっぱい楽しく時間を過ごすことができました。

また、郵便局にもムーミンの切手やグッズがあり、フィンランドに着くとすぐに郵便局に行って娘に絵はがきを出しました。帰国してから娘にはがきの感想を聞いてみると「？」という表情。私がワクワクして「フィンランドに到着！」と書いたはがきは、帰国翌日に着きました。残念！

翌日は土曜日なので、世界遺産「スオメンリンナ」という海上要塞に出かけました。とてもいい天気の中で、船で一面氷の海をバリバリとかき分けながら行き、やはり極寒の地であることを実感しました。その後「かもめ食堂」を見てあこがれていた海辺のレスト



ラン「カフェ・ウルスラ」に行きました。「ウルスラ」は海を見ながら、食事を楽しめるところです。冬のこの時期なのに温かい日であったので、私たちもフィンランドの日差しを浴びながら、きれいな海を見ることができ、そしておいしい食事を食べ、幸せなひとときを過ごすことができました。

学校教育はその国の文化や政治に深く根ざしたものであり、教育現場で見えるものはその一部に過ぎないということ、また教育は国を作っていくもの、ということが感じられました。

情報は一瞬で全世界に流れる時代になりました。これらの情報を得て自分で判断し実践していく力をつけていかなければならないということを実感する海外研修になりました。

このような機会を与えて下さった大学の教職員の皆様、現地でお世話になった方、それから一緒に行き楽しく過ごさせて下さった先生方、本当にありがとうございました。

京都、めっちゃ好きやねん！

日本語・日本文化研修留学生 マグダレナ・ビェリンスカ
(ポーランド出身)

2011年10月に向島学生センターの前でタクシーを降りてからの記憶がぼんやりとしか残っていない。ポーランドの空港までの旅行とドイツのフランクフルトにおける乗り換えを含めて、飛行機の到着まで22時間の徹夜だった。おまけに、今すぐしなければならぬことが山ほどあって、やっと眠れるようになった途端、一日の疲れや家族への恋しさで涙があふれた。「なんてことをしたのか！一年間って、耐えられないじゃないか。」と自分に繰り返していた。

とはいえ、その翌日、いい眠りの後で新しい友達に会って、大学の方々に色々説明してもらって、まるで復活したように笑顔が戻ってきて、今までの心細さがなくなった。留学を終えるまで、泣くことは日本と別れの挨拶をいう瞬間にしか二度と現れないに違いない。この一年間は私にとって一番素敵な時期で、一生で何度も思い出して恋しく思いつづけることになるだろう。

居住するようになった場所は大学から遠く離れていて、最初は正直びっくりした。交通費が(特に母国のポーランドと比べると)非常に高く、携帯電話以外の初めての買い物は自転車だった。普通の人に比べて自転車のスピードがずっと早い私でも、大学までは20分、隣の宇治市の小倉駅までは30分、京都駅までは45分、出町柳までは1時間20分かかった。

4月から大学まで徒歩15分位に離れた場所へ引っ越したが、向島に住んでいたことは恵まれていたのだなと思った。とても安くておいしい「かつば寿司」という回転寿司屋さんがあり、寮の周りにあるマックドナルドやすき屋などのようなお店よりずっと美味しく健康にいい食べ物屋だった。また、同じポーランド人の友達と発見したブックオフもあって、もう本や漫画を数えられないほど何冊も買って来た。元々、日本語の勉強を始める機会、そして来日するために3年間勉強し続けたのは漫画とアニメへの関心からであった。

勿論、買い物や読書以外にも、日本の文化を体験する機会があった。学生課の方々や先生方が、何かイベントをお知らせしてくれたり、あるいは国際交流に興味を持つ機関に私を紹介してくれたりしました。日本で撮った写真と録画した動画のみのフォルダーだけで

30ギガバイト以上あり、その半分ぐらいは景色や文化的な物事(いっぱいあるのは当然でしょう)だが、イベントやパーティー、旅行等の写真を何枚も撮って、遊びに来たかと思われるかもしれない(文化体験とも言えるが(笑))。

大学の11月からサラダボウルという国際交流に興味を持つ日本人学生と外国人留学生の団体に参加した。もうとくに20歳を超えていたけど、他の留学生と共に2012年1月に和風成人式に参加させてもらった。着物を着たり、自分の国の成人パーティーについて発表をしたり、何種類かのお酒を試したり、他の国の成人式や一人前の意味について討論した。その時、年齢的にもう大人なはず(しかも、ポーランドは18歳から)なのに、必要な資質、責任感や知識はまだ足りなく、しっかりして成長する機会は今こそだと分かってきた。勿論、それは帰国してから考えるつもりだ(笑)

最初は興味があまりなかったが、サラダボウルの本格的な一員のように感じて、様々なイベントを手伝ったり行ったりもした。おかげで大学ヘレポートを三週間も送り忘れたこともあった。このボランティア団体の人たちは、私にとって、きっと忘れはしない大事な友達になった。

自分で発見したり経験を集めたりすることはもちろんだが、友達がいて運が良いことも不可欠だった。

日本語の言葉遊びに興味を持っていることを知っている友達がいたおかげで、「痛快!明石家電視台」というテレビ番組にオーディエンスとして誘ってくれた。スイスと日本のハーフのトリンドル玲奈さんに質問できたうえ、久しぶりに簡単なドイツ語も思い出させられた。自分が書いた絵もゲームに使われた。それに、そもそも京都に住みたかった理由、すなわち私の大好きな関西弁を半分も分からなくても、いっぱい聞かせてもらった。

京都教育大学は留学生にPICNIKというプロジェクトを薦めている。私は最初から申し込み、様々な小学校と中学校から自分の国の文化—基本的情報、歴史や伝統など—について発表し、工芸美術や伝統的ダンスを児童や生徒に体験させる依頼を数回もらった。

関西弁は第一だが、京都が私の一番好きな市になった訳が…。観光客の数が数えきれない世界遺産などの有名どころ、「金閣寺」、「清水寺」…もある一方で、誰も訪ねて来ない昔の雰囲気のある狭い道や他に見る価値のあるところで満たされているところだ。

一年間はあっという間に過ぎてしまったが、そのうちに日本、特に京都を愛するようになった。どんなに実家に帰りたくて、家族や友達に会いたくて、家の3



写真1. 3月にサラダボウルフェスタでポーランド料理を作って参加者に味見してもらった。自慢するつもりではないけど、美味しくできた！



写真2. 今学期の始まりから琴を習っていて、2曲弾けるようになった。

匹の猫を撫でたくても、ここを離れたくはない。確かに、新しい環境に慣れやすい私に改めて国で生活を送り続けるのはそんなに難しくはない気がする。日本以外の場所に行ってみたら同じようにその国と恋に落ちることも不可能ではない。それでも、もし将来何かの奇跡でもう一回ココに来るチャンスがあったら、もう戻れなくなるかもしれない。日本は愛し、京都はめっちゃ好きやねん。



写真3. PICNIKの発表にて。児童たちが興味津々に聞いているのを見ると、自分自身や自分の文化に自信を持ち、自国に関する知識を伝えるのに意味があると感じ始める。



写真4. 成人式で着付けをはじめ、色々日本文化を体験してもらった。インターネットテレビも放送してくれた！

演奏家を育てる力

音楽科教授 饗場 知 昭

私がイタリアへ文化庁派遣で留学してから30年。大変昔の話になるがいつもあの時の熱い思い出が頭をよぎる。熱い思い出という誰しも恋愛を想像するが残念ながらそうではない。何かというと、それはコンサートの体験である。私はオペラ指導者で著名なカンポガリアーニ氏に師事し、運よくコンサートに幾度となく出演できるチャンスを得た。その時の感動が今でも心に熱き想いとなって残っている。半年の間に10回ほどのコンサートであったろうか。その中であの有名なタリアヴィーニ（世界的名テナー）の主催するコンサート、これが特に印象深いものであった。

彼の持ち物であるカジノが演奏会場であった。カジノというからにはいわゆる賭け事するような場所を想像していた私は、その場所に到着して驚きのあまり、文字通り“目が点”になってしまったのである。会場内は壁画で装飾され大きなシャンデリアが部屋中をこうこうと照らしている。そのなんと美しいことか。私はその中を歩いて奥にある控え室に通された。その部屋も美しいジュウタンが敷きつめられ、ソファは柔らかく体が包まれるようであった。さすがに世界の名テナーとして君臨した人だけのことはあると感心したものである。しかしこれが熱い思い出の一コマというわけではない。これからである。

夜8時頃、その町の人達が1人また1人と会場にやってくる。その数は200人、それで満席であった。タリアヴィーニ氏は直々にわたしのもとへあいさつに來られた。カンポガリアーニ氏が“彼は日本のテナー、アイバです”とひき合わせてくださった。今でも彼の優しい眼差しが脳裏から離れない。8時過ぎタリアヴィーニ氏がステージに立つ。話声で満ちていた会場は、まるで誰もいないかのような静けさに包まれる。

“日本のテナー、アイバを紹介します”という言葉に、私は胸の鼓動が耳に聞こえるほどの緊張感で、ステージに向かっていった。と、その時静まり返った会場内が、いっせいに“ヴェンヴェヌート（ようこそ！ブラーヴォ！）”という声で包まれたのである。会場を見渡すと、観客の熱く、優しい眼差しが僕の方に向いているのではないか。“よく来た、頑張れ”という声に私は目頭が熱くなったのを覚えている。私が一曲目オペラ「愛の妙薬」から“Una furtive Lagrima（ひとしれず涙）を歌います”というと、待ってました、という声。そして最前列に座っていた老夫婦が、その

旋律を口ずさみ始めたのである。私はその雰囲気には吸い込まれるように、気持ちよく歌えた。自分なりに、合格点を与えてもよいほどの結果であった。

私はここで、自分の自慢話をしているのではない。演奏者と観客が一体となった、熱いひと時のことを言いたかったのである。

この間京都で外国のオーケストラのコンサートに出かけた。久しぶりに良いコンサートを聴いた。私はたびたびブラーヴォを送った。しかし、周りの観客は私の顔を見てうなずくだけである。なぜ自ら声を出して表現しないのだろうか。観客の声がどんなに演奏者を勇気づけるか。演奏者はステージで育つといわれる。特に若手の音楽家はこの反応を真剣に受け止め、成長のエネルギーにしていることを知っていただきたい。よい演奏の時は思い切り大きな声で、ブラーヴォを送ってほしい。

さいきん“さくら（ブラーヴォ屋）”と呼ばれるやからが客席にいるのを見かけることがある。ただ出演者の知り合いであるとか、親戚であるということで演奏の良し悪しに関係なく“ブラーヴォ”と叫んでいる。こういう人たちは演奏家を育てるという観点から見れば無意味な観客とっていいだろう。演奏する方も真剣ならば聴く方も真剣そうしたひと時から、演奏（家）はさらなる飛躍を遂げるものである。



京教大に育まれて

教育学科教授 水谷宗行

ここでは、私が京都教育大学での生活から、ある意味でより広い場を得て行く話題やその様子について話したいと思います。そのため話が、京都教育大学から少々広がり過ぎるということにもなるかも知れません。

私自身本学の出身で、2回生になる時にそれまでの木造の旧兵舎の研究室から現在の研究室への移転をお手伝いしました。その当時、心理学教室では夏休みの大きな教室行事として心研旅行と呼ばれた3回生が企画する行事があり、4回生や先生方も参加されていました。最初は、訪問地の小学校などで知能検査なども行うといった実務や研究の色彩も強いものでしたが、その後は討論会などの学習会・研究会的なものとなってきました。それでも先生方や先輩と2泊や3泊と寝食を共にする貴重な機会となっていました。1回生の4月に先輩が企画する新入生合宿に始まり、夏休みに入るとその頃の一類（小学校教員養成課程）は5泊位の水泳訓練があり、所属する各クラブでの合宿など多くの合宿の機会があったように思います。

私は九州大学で大学院生活を送ることになりましたが、そこでも合宿形式の研究会を経験する機会が多くありました。夏の合宿研究会は4泊位のもので、その中で研修所から相当離れた久住山（1787m）へ一日がかりで登るといった恒例行事も組まれていました。

私の赴任は林先生の学長就任に伴うもので、心理学研究室には岡本先生・一谷先生という年輩の先生そして相田先生・矢野先生がおられました。私がこの大学に勤めて最も幸運だったことは、近隣の大学の研究者や院生の方々と、発達心理学領域の研究会を持ち続けてこられたことだと思います。岡本先生を初めとして、矢野先生そして発達障害学科に野村先生という発達関係の先生方がおられたこともあり、また本学が交通の便に恵まれていたことがあります。近年、JR藤森駅の誕生でこの地理的条件は一層恵まれたものになりました。最初はPD研という略称（Psychology of Development）で呼んでいましたが、この略称が英語として正しいかどうかより、語呂のいいことが使用された要因だったのでしょうか。この研究会は岡本先生を中心として、京大やその他の大学院生が口伝てにその門を叩くことになっていました。その後関西地区の大学教員がより大きな比重を占める「関西認知発達研究会」として続くこととなります。

この研究会は、現在も引き続き行われています。この他にも何かある時期具体的な仕事を通じての関係はできましたが、このように30年余り、基本は月に1回を目指し年に何回もの研究会を重ねてきたことは、私たちの大きな力になってきたかと思います。現場にお勤めの方々も参加され、いろいろな領域の話題に触れることができましたし、話題の繰り返しの中でそうした領域の発展や変化についても学ぶことができました。自分が発表する機会に、特に学ぶものは多かったかと思います。当然と思われるかも知れませんが、学会などでの討論では、それまでの経緯やこれからの発展性についてまでは十分話し合うことができません。また少々突飛な話題や考えなども扱えないということになります。一つのテーマに絞った会というのではないので、そこからすぐに何か成果というものが出るということではないのです。しかしそのメンバーが核となって本が生まれたり、研究が育つということになりました。

私が35歳の時に、若手研究者を海外の研究施設に派遣し、10ヵ月学ばせる制度が始まりました。私は年齢制限の上限であったことも幸いして選ばれ、研究会との縁も深かったスコットランドにあるエディンバラ大学のパウアー教授の元へ向かうことになりました。ここは乳児や発達についての世界的な研究が行われている場所でした。そこで受けた刺激や考え方をその後活かせるかは分かりませんが、一人で深く考えることと刺激し合うことの大切さを学んだと思います。例えば木曜日のランチ・ミーティングは、さまざまな領域の人が昼食も持って寄ることができ、1時間程度の時間で発表や討論が行われる場でした。完成された研究ではなく、これからのアイデアが示されるといった色彩の強いものでした。基本的な立場を明らかにしながら、問題やそのための研究法・対象を求めて行くという研究が多かったことも印象的でした。こうした基本的なことを実践していくには、大きな力と覚悟が必要なのでしょう。この後アメリカのコーネル大学を訪れ1ヵ月程滞在したのですが、少し研究態度に差を感じるがありました。新しいトピックを追いかけるといった雰囲気が強かったように思います。

その頃は学内でも先生方の領域を越えた読書会なども生まれました。哲学の先生を中心として人文系や音楽の若い先生方だったのですが、春は花見に行った

り、何人かはスキー旅行のメンバーだったりしました。今も若い先生方では色々とな個人的な交流を深める機会があるのかも知れないのですが、私の場合に年代を越えてお付き合いをできたのは、テニスが大きな役割をしていました。私は学生時代テニス部に属していたのではなく、友人と学内のコートで打ち合ったのが最初です。そして今では考えられないことですが、B棟の屋上でテニスの壁打ちをしていて体育学科の野口先生とお会いし、昼休みにコートでお相手をさせてもらうことになりました。九大の大学院でも院生や教員に熱心な方々がおられ、チームを作って練習や大会をし、また学外の試合にも出かけました。この時のメンバーとは、今も機会を捉えて合宿のようにテニスをし、語り合うことになります。

本学へ教員としての赴任後もテニスを続けることが、いろいろな人や別の世界との出会いを与えてくれました。その頃、1月初め附属の先生方とも一緒に、教職員で長野の志賀高原へスキー旅行という行事がありました。私は赴任して最初の年に、テニスをしていた先生方に誘われ、そのスキー旅行に同行することになりました。体育学科の先生方から初めてのスキー指導を受け、また何かと失敗も多い旅行でした。一晩に新雪が60cm以上積もり、その吹き溜まりで転倒し水に溺れるようにもがいたり、猛烈な吹雪の中遭難を心配しながらの避難があったりと。この時に体育学科の先生方や他学科の先生方はもちろん、附属学校の先生方や事務局の方たちも身近に知り合えたのは、とても大切な機会でした。結局この時に知り合った女性と、後に結婚することにもなります。

そしてその後も続けていたことから、その頃学生課の行事として行われていた一般学生のスキー引率をすることになり、良い思い出となりました。新赤倉スキー場でその前にスキー実習を行っていた体育学科の

学生さんを助教とし、1グループ10人弱の学生さんを指導することになります。その頃行われていた夏の水泳訓練に比べると、全体の学生数も40名位とごく小規模で、のんびりとしていました。しかし練習時間には集中し、少々の雨や霧でもコースを選んで熱心に練習したものです。霧の中でも、比較的なだらかでわかりやすいコースで何度も基礎的な練習をしていると、霧が晴れた時には随分と上達していて驚いたりもしました。妻と現在までスキーを続けられているのも、幸運です。この3月には、妻の職場のスキー同好会に参加させてもらい、北海道でスキーを楽しみました。

ところでテニスの話に戻しますと、その頃大学正門を入った所のコートが使用でき、教職員で昼休みにもテニスをしていました。また後には学長杯戦と名づけた大会も行われ、教職員や附属の先生方が参加されました。私の方は大学とは別に、宇治でも地域の方々とテニスを行うようになりました。最初別のご夫婦と始めた会がその後グループとなり、やがて40人ほどの規模になります。日曜日の午前中に行っている会ですが、使用していたテニスコートの閉鎖などもあり、現在は20名余りの会員で別の民間コートで続けています。職種も様々で夫婦での参加も多く、宇治市等の大会に参加したり、忘年会とともに時に合宿旅行を企画したりとなかなか盛んです。

その他ゼミ生や卒業・修了生を中心に、これまで約20年間、主に信楽で年に4回程度一泊研修の形で集まりを持ってきました。私たち夫婦双方の関係者が集まることにはなりますが、全員が15分程発表の機会をもち、料理を分担し、近くの公営コートで初心者もテニスを楽しむという時間があります。親子や夫婦で訪ねてくれる人たちもあり、私たちが今後も続けていけたらと願う催しとなっています。



木の実二題—イヌビワとマテバシイ

環境教育実践センター教授 岡本正志

B棟北側、運動場との間の道路から食堂の方を眺めると、たくさんの魅力的な木が両脇に生えている。その中から、二本の木の実に関わる断りをしてみよう。いずれも、私の故郷の思い出とも繋がっている。



写真-1 右下にイヌビワ、給水塔下にマテバシイが見える

写真の右下に、傘状に枝葉を張り出している低木が見える。イヌビワという。見た目はまことに地味で、通り過ぎる学生たちを観察しても、誰一人この木に注目する者はいない。だいたいイヌなどという名前が付けられている場合には、垂流の意味合いが込められているものだ。だからこの木も、ビワではないが、それに近い実がなるという意味で名前が付けられたのだろう。しかし、じつは教材としてもまことに魅力的な樹木なのである。

目立たないが、枝を折ると白いネバネバした乳液が出てくるので簡単に見分けることができる。実は熟すと食べることができる。夏にはまるでブルーベリのように青黒く熟す(写真-3参照)。

高知県北川村に「モネの庭」がある。余計なことだが、北川村はかの中岡慎太郎が生まれた村であり、私はその隣町で生まれたので、坂本龍馬よりも中岡慎太



写真-2 イヌビワの木



写真-3 イヌビワの木の实

郎の方が偉かったと思っている。実際、本当に薩長同盟を作ろうと走り回ったのは彼の方なのだ。龍馬は、最後の良い所取りをしたにすぎない。

さて、以前、帰郷した際に「モネの庭」のレストランで食事をした。ブルーベリのような実が付け合わせで出されたが、ちょっと違うようなので尋ねると、店のシェフが、「名前は知らないがそこに生えている木の实です」と言ったから、木を良く見てみたらイヌビワだった。実を食べることができるのは知っていたが、レストランで出されたのは初めての経験であった。店の人に、「この実の中には小さなハチが住んでいるのですよ」と言ったらびっくりしていた。

初夏の頃、大きくなった実をとって、そっと割ってみると、中に小さな黒い点のようなものが入っていることがある。イヌビワコバチというハチである。

イヌビワの実は、イチジクと同じ構造をしており、実の内部に多数の雄蕊と雌蕊がある。雌蕊の子房の集合体が、イチジクを割った時に見えるブツブツである。実の先には小さな穴があり、穴の内側周辺に雄蕊が密集している。実の中に雄蕊や雌蕊があるのだから、通常の受粉はできない。いったいどうやって受粉しているだろうか。驚くべきことに、実の中に小さなハチを飼っているのである。これがイヌビワコバチである。名前の通り、本当に小さなハチだから、ルーペで見なければハチかどうか分かりにくい。足が6本で羽を持ったれっきとしたハチである。

イヌビワコバチの雌は、イヌビワの実の中の子房に産卵する。やがて雄の方が先に卵から孵る。先に孵った雄は、まだ卵の中で眠っている雌に受精していく。受精が終わると雄はそのままイヌビワの内部で死んでしまうので、実を割ったときにその死骸をみるのが

できる場合もある。イヌビワコバチの雄にとって、小さなイヌビワの実の内部のみが、彼の宇宙のすべてである。実の外に広大な素晴らしい世界があることなど、ついぞ知らずに短い一生を終えるのである。何かのきっかけで、彼が外の世界を知ったら、コバチの世界に革命をもたらすのではないか、などと、まるでプラトンの洞窟の寓話のような想像をしてしまう。もっとも、職場と家庭の往復のみをしている人間の男どもも、イヌビワコバチとたいした違いはない。広い世界を本当に知りうるのは、女性なのかもしれない。

やがてゆっくりと目覚めた雌は、産卵のために実の穴から外部に出て行くが、穴の出口周辺の雄蕊の林の中をくぐり抜けねばならず、体中に花粉を着けて外の世界に飛び立つことになる。新しい実を見つけるとその内部に潜り込み、雌蕊の子房に産卵する。この時にイヌビワは受粉するわけである。

こうして、イヌビワコバチは実の内部という安全な場所に産卵することができ、イヌビワはイヌビワコバチに花粉を媒介してもらって確実に受粉できる。両者は、きわめて強い共生関係にあるといえる。7月頃、イヌビワの実をとってぜひそとと割ってみてほしい。たくさんの子房の中に黒ずんだものがあれば、針先で子房を割ってみると、眠っている小さな八チを見つけることができる。子供たちの目の前で、これをやっていると、必ず大きな歓声をあげる。



写真-4 中央広場ベンチ裏のイヌビワ
(奥の木の下に広がっている)

イヌビワは、私の知る限り、学内3カ所に植えられている。中央広場のベンチ裏南側には割合大きく育ったイヌビワがあり(写真-4)、この原稿を書いている8月末には黒く熟した実がたくさん成っている。また、大学の正門を入って、F棟の方に分かれてすぐのA棟側にも生えているから、ぜひ自分の目で確かめてほしい。

さて、最初の写真にもどって、正面の給水塔下に見える木立がマテバシイである。私の故郷にはシイの木がたくさんあって、よくシイの実を取りに出かけたも

のだ。冬になると街角にシイの実売りが出ていた。買いにいくと、新聞紙を筒状に丸めた中に、ザッと暖かく煎ったシイの実を入れてくれた。美味しいおやつであった。そのシイの実はスダジイという種類だったが、マテバシイの実も食することができる。じつは、私は今でも時々この実を拾って、おやつ代わりに食べている。幸か不幸か、学内では私以外に拾っている人を見たことがない。みんなもっと食べればよいのにも思う。ナッツなのだから栄養も豊富だ。

マテバシイは、シイの種類の中でももっとも実が大きくて食べ応えがある。煎るとほんのりと甘くて美味しい。煎るときの殻の割れる音を、シイの実の「はぜる音」と言う。フライパンで煎っていて、パチパチとはぜる音がしだすと、私は一気に少年時代に戻ってしまう。故郷の貧しかった家の光景と、私をニコニコと見ている母の姿が目の前に現れるのだ。

シイの実やアラカシなどのドングリ類は、教材としても魅力的である。クッキーの材料にもなるし、小さなコマやヤジロベエなどのおもちゃを作ることもできる。もっとも、アラカシなどはタンニンが多くて、そのままでは食することができない。シイの実だけは、そのままでも何の問題もなく食することができるので、子供たちと一緒に拾って、煎って食べたり、クッキーを作ったりしてほしい。総合的学習や生活科などの豊かな教材となること間違いなしである。



写真-5 給水塔下のマテバシイ



写真-6 マテバシイの実

国際化・国際化教育

附属京都小中学校（中高等部）副校長 橋本雅子

昨今、教育現場では、国際化、国際化教育等が頻繁に取り沙汰され、その推進に向けて大学を含む全国の学校が教育課程やカリキュラムに国際化教育を取り上げ、工夫を凝らしています。教育現場では、具体的にどのような教育を進めることが、国際化または国際化教育につながるのか試行錯誤しているところです。英語の授業時間数を増やし英語が日常的に話せる生徒を育成することが国際化なのか、他国と交流をすることが国際化なのか、または、社会的な国際問題を取り扱うことが国際化なのか、色々ありますが、本校では、目指す生徒像を「自らの将来展望を切り開いていく能力を身につけ、21世紀をリードする生徒」を掲げ、教育目標を①国際化、情報化、科学技術の進歩に対応していける生徒の育成。②主体的に社会と関わり、豊かな感性、豊かな人間性を持つ生徒の育成。③発展的な学習に取り組み、高い知性と実践力を培う生徒の育成。④自己の個性を理解し、主体的に進路を選択できる生徒の育成。とし、この教育目標を達成することが、すなわち国際化、国際化教育なのだと思います。その達成のためには、自分の考えを持つこと、他人とのコミュニケーションが図れること、多角的な考えができること、創造的な発想ができることなど要素はたくさんあると考えますが、今回は、本校が取り組んでいる実践をほんの少し紹介いたします。



昨年度から本校の研究課題を「国際化社会に対応し、自己実現をめざす生徒の育成」とし、サブテーマを昨年度は「大学・地域との連携プロジェクト」としました。大学の先生や地域の先生（茶道や華道の先生）と連携し研究課題に取り組んできました。その一つの授業実践として「芸術プロジェクト」では、おもてなしの心を育む～日本文化を通して～とし、日本文化体験の授業を行い、研究発表会に参会して頂いた方に茶道や華道を披露したり、日本の音楽や大正琴、舞踊を披露しました。この取り組みは、8年生の総合的な学習の時間にもタイ国の皆さんに日本文化を紹介することを目的に実施しています。

また、16年にわたり「タイ国王立アユタヤ大学附属中高等学校」と交流協定を結び、毎年、20名の生徒がタイ国から本校へ、また本校からタイ国へホームステイを体験しつつ、共にそれぞれの学校において交流を続けています。



10月にタイから本校に来られる時には、日本の文化を伝えたり発信することが中心の学習を計画します。また、代表生徒がタイ国を訪問するときは、タイ国の異文化を体験し、生活を共にしながらタイ国の文化を理解します。そして帰国後には、全校生徒の前で、タイ国での交流の様子を紹介する機会を設けます。これらの取り組みを通じて日本文化の再認識や異文化理解につながっていると思います。

これらの取り組みを通して、子ども達が、自分の考えのみで行動するのではなく、他人の立場や考えを理解した上で行動することや、日本のことのみならず世界に目を向けるなど、学習や体験を通して視野が広がり成長し、自己実現につながることを願います。

ロボカップ・ジュニア 2012メキシコ大会 —3年連続出場・3年連続入賞—

附属高等学校副校長 齊藤 正治

ロボカップは、西暦2050年「サッカーの世界チャンピオンチームに勝てる、自律型ロボットのチームを作る」という夢に向かって人工知能やロボットの研究を進めながら、技術を広めていくことを目指して行われています。自律型ロボットというのは、自分で判断し行動するロボットのことで、競技が始まって人間の手を離れると、リモコンなどでの操作はなく、書き込まれたプログラムに従って行動します。ロボカップの中でジュニア部門は19歳未満を対象とし、競技の勝敗だけにこだわるのではなく、未来のロボット技術者の育成を目的とした教育的なプログラムです。

本校の電子工学部から3年生の山岸信博君、辰巳颯一君、田中秀典君の3名が、サッカーBオープンクラスに出場しました。世界大会に出場するまでには長い道のりがあります。京都大会での優勝、京滋奈大会での優勝、尼崎で行われた全国大会での準優勝と、地区大会から勝ち上がっていき、ようやく世界大会への出場権を得ることができました。3年連続で世界大会に出場するだけで大変なことですが、さらに素晴らしいのは3年連続入賞を果たせたことです。



世界大会では、予選が3日間、1日3試合ずつ行われ、その勝率で決勝へ進むチームが決まります。1試合は10分ハーフの前・後半で行われます。ジュニアのサッカーは1チーム2台のロボットで戦うのですが、ボールをめぐるのかなり激しいぶつかり合いがあります。途中でロボットが壊れたり、部品の摩耗で動きが悪くなるというようなことも起こります。本校のチームはロボットの設計からスタートし、本学の関根文太郎先生や赤尾修二先生に多大なご協力をいただきながら機械工作をしました。そして、電子回路の製

作・組み立て・プログラミングと全てにおいて自分たちの手で行いました。様々な試行錯誤を繰り返して、壊れにくく、修理や部品の交換が容易なロボットを作り上げてきました。

チームの中心は山岸信博君です。機械の設計、電子回路、プログラムというハード・ソフトの両面を引っ張ってきました。しかし、チームは1人では成り立ちません。辰巳颯一君と田中秀典君の2人がいて、それぞれが仕事を分担し、互いを補い合いながらやってきました。実戦で試合をどう進めていくかを指示するキャプテンの仕事、試合のビデオ録画と得点の入った時間の記録、試合中の故障への対応、試合が終わってからの分析、ロボットのメンテナンス、試合までの時間管理など、試合中も試合が終わってからもしっかりやらなければならないことがあります。それを3人で協力し合い、数々の試練を乗り越えてきました。



世界大会で大切なことは、ロボットを強くすることだけではありません。コミュニケーションを積極的にすることも必要です。試合はスーパーチームとよばれる2～3チームによる団体での対戦になります。スーパーチームの中での相談や情報交換も必要になりますし、審判や試合相手との交渉も重要です。共通語として英語を使用することになっています。キャプテンミーティングでのルールや試合の実施方法などの説明も英語です。3人とも英語はそんなに得意では無いようでしたが、積極的な姿勢は常にもっていました。

また、日本チームの中での交流も重要になります。高校生だけではなく中学生や小学生もいます。小学生には英語での交渉が難しい場合もあります。持って来ているだけの部品では足りなくなることもあります。



そこでもお互いに補い合うこと、助け合うことが必要になります。全国大会で戦って、一緒にメキシコへやってきたわけですから、そんなに良く知っている者同士というわけではありません。でも、同じ日本からやって来たという仲間意識はあります。そんな中で、

ロボットの情報を交換したり、対戦した他国のチーム情報を教えあったりということをしていました。

大会成績はスーパーチームによる団体戦で3位入賞でした。一昨年度が3位、昨年度が2位に続いて3年連続入賞です。また今年はインディビデュアル（個人戦）で4位に入り、チームとしては最高の結果を残せました。

この大会を通じて彼らが学んだものは、単に強いロボットを作ることだけではありません。3人のチームとして活動するために何が必要なのか。世界大会という大きな舞台の上で、他国の人たちとチームとして、あるいは対戦相手として交流するにはどういう風になればよいのか、といった人との言葉のやりとり、心のふれあいの大切さも学んできました。ここで学んだことは、血となり肉となって、きっと彼らを一回り大きな人間に育ててくれることでしょう。

二つのワークショップ

附属特別支援学校副校長 高岸正司

本校では、夏休み期間を使い、様々なワークショップに取り組んでいます。生徒・教員にとって、日頃できないような大切な学びの場にもなっている二つのワークショップについて紹介します。

陶芸ワークショップ

陶芸ワークショップは、始まってから9年になります。本学の美術学科の先生と学生、そして本校の教員が企画し、特別支援学校の高等部生徒が大学に集まり、何日もかけて、陶芸の作品作りに取り組めます。今までのテーマを上げれば、「凹の形」「つながる土 言うカタチ」等、ユニークなものばかりです。

今年度のテーマは、「陶テムポール」。

学生と生徒が一緒になって、まずは粘土を練っていきます。木槌を使って細かく砕いたり、足で踏んで練り込んだりと、その一つひとつが身体を使った楽しい取り組みでもあります。次に一人ひとりがいろんな顔や模様の作品を作り、釉薬を塗っていきます。生徒たちは、友だち同士見合ったり、大学のお兄さんお姉さんはどんな色塗っているのかなど様子を見たりして、それぞれ個性豊かに作品が出来上がりました。最後は、いよいよ楽焼き窯で焼きます。焼き上がり、窯から出した時の色具合はひと味違います。「これ、僕のや」「この色きれい」と、いろいろな言葉が飛び交いました。

昼食は、生協で食べたり、みんなでスパゲッティを作ったりして、一日を過ごしました。

大学の学園祭の時には、学生さん手作りのDVDで、みんなの作品作りの様子を観て、ギャラリートークを行います。

大学の学生にとっては、作品作りを通して、特別支援学校の生徒を知るよい機会になっています。また、特別支援学校高等部の生徒にとっても、学校とは違う場で大学の学生と作品作りを通して、いろんな学びが



あるよい学習の場になっています。

大学との連携の一つの形として、これからも大切にしていきたい取り組みです。

ワークショップ～これは使える！教材づくり～

このワークショップは、他校のたくさんの先生方と、本校の様々な教材づくりを一緒に行う中で、本校のことを知ってもらう取り組みです。

本年度は、8月2日（木）に、二つの分科会で教材づくりのワークショップを行いました。

一つは、「あそんで、うたって、おどって」の分科会です。午前は本学の音楽科准教授の斉藤先生、午後はリトミック研究センターから遠藤さんを講師に招き、リトミックとわらべ歌を主題に、たくさんの先生方が身体を存分に使い歌ったり踊ったりし、教材について考えることができました。



もう一つは、「竹や木でつくろう」の分科会です。本校のたけのこ山から切り出した竹を使って、みんな思い思いに、竹灯籠や竹のデザートや竹炭等いろんな作品作りに挑戦しました。

近畿や東京の附属特別支援学校の先生方や京都市の小・中学校の育成学級の先生方と教材作りを通して、それぞれの学校の子どもの顔を思い浮かべながら、話に花を咲かせ、よい時を過ごすことができました。

特別支援学校（これはあらゆる学校でもそうですが）においては、先生同士が同じ場で顔を合わせて、生徒たちのことを思い浮かべながら、語り合い、教材を深化させていく営み～教材作りにおける協働化～が、より大切になってくるように思えました。



体育学科講師 小山宏之

平成23年度10月に本学体育学科に着任しました。また、平成24年度4月からは教育支援センター実地教育部門の兼任教員としても配属され、体育学科と併せて活動を行っています。本学に着任以前は筑波大学にてオリンピックでメダルをとるためのトップアスリートに対する科学的サポート、大学体育の授業運営および大学体育カリキュラムの改革に関する研究などを行っていました。

私の専門はバイオメカニクスという分野であり、走、跳、投をはじめとする基礎的動作のメカニズム、スポーツ運動を実践、指導する時の評価基準の定量化、効果的な教え方やトレーニング方法などを研究しています。そして、それらを踏まえ、学校現場で必要になる「運動に関する知識と理解」、「運動に関する評価の観点」、「運動を習熟する方法」などを正しく理解

する教員の輩出をしていくことが使命の1つであると思っています。

また、教育支援センターでは「京都教育大学学校運動部活動指導者育成事業」を担当しています。この事業は、子どもの体力や運動能力の低下、中・高の部活動指導教員の不足という現状を踏まえ、大学に在籍する全ての学生を対象に、運動部活動や体育行事を安全に効果的に指導できる実践的指導力、マネジメント力を持つ教員を育成するプログラムを提供するものであり、プログラムを修了して一定の力量を備えた学生には「京都教育大学学校運動部活動指導者資格」を発行しています。

まだまだ教員として新米なのですが、努力して参りますので、今後ともよろしくお願いたします。

国文学科准教授 天野知幸

この四月に着任いたしました天野知幸と申します。これまで滋賀大学教育学部に勤めておりました。専門分野は日本の近現代文学で、ここ数年は第二次世界大戦後の文学についてGHQによる検閲の影響なども調べながら研究をしています。前任校でもそうでしたが、私の研究分野は文学ですので、学生さんの関心と授業の内容とが必ずしも一致するわけではありません。しかし、それでも文学好きの学生さんは少なからずいるもので、彼らと文学の面白さや魅力を話すのが私の大きな喜びです。また、教育学部での教育は自分の専門分野の意義を外から眺めなおす良い機会を与えてくれます。文学を教えることが、将来、教員を目指す学生さんたちにとってどう役立つのか。できるだけ外部者の視点からそれらを考えるようにしています。

ところで、GHQの検閲などというややこしいことを研究し始めたのも、自分の属していた世界から出て、アメリカの大学院に留学したことがきっかけでした。日本の大学院で三島由紀夫を研究していた私は、資料も研究者も圧倒的に多い日本を離れて海外で勉強することなど考えたこともありませんでした。しかし、アメリカに貴重な日本文学のコレクションがあることや多くの日本文学研究者がいることを知り、無知を思い知らされました。彼らとじっくり学問的な対話をしたい、彼らに届く言葉を持ちたいという願いは、今でも研究の大きな原動力となっています。

大学はどんな時代においても、考えることや新しいことを知る喜びに満ちた場であってほしいと願っています。自分自身が常に学びつつ、学生さんと知の喜びを共有し続けてゆけたらと思います。

今年の4月に着任した理学科の今井健介です。大学の附属高校を卒業したのち、京都大学農学部・同大学院で学び、他大学教員としての勤務を経て、本学で理科教員の養成に携わることとなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

専門分野は、生物のさまざまな姿や振るまいが進化の中でどのように役立ってきたのかを研究する進化生態学で、とくに植物と植物を食べる昆虫の関心に興味があります。植物を食べる昆虫から身を守るために植物がどのように進化してきたのか、植物が進化させた防衛戦略に打ち勝つために昆虫はどのように進化してきたのかを研究してきました。また、環境と生物の関わり方の研究、再生型バイオープや身近な都市緑地の自

然を利用した市民環境教育にも取り組んできました。これらの経験を今後の理科教育に生かしたいと考えています。

理科にかぎらず科学全般において重要なのは、いろいろな事象を「あたりまえ」と思わず、事象の背後に潜む不思議さや「なぜ」を見つけ出し、興味深く感じるのだと思います。日常の中では忘れがちですが、腰を据え、目線を低くして見つめれば、身近な自然もさまざまな不思議に満ちていることを発見できます。学生の皆さんが身近な自然、生物の不思議さや面白さを児童生徒と共有し、問い続け、学び続ける教員へと成長される過程を手助けできるよう、力を尽くしたいと思います。

子どもを中心に据えた幼保一体化に向けて

幼児教育科准教授 古賀 松香

今年度4月に幼児教育学担当として着任致しました。これまで幼稚園教諭並びに保育士を養成する大学に勤務しており、実習等で保育所の先生方とかかわることが多くありました。

その中で特に学ばせて頂いたのは、家庭の養育力の著しい低下と福祉としての保育のありようでした。毎朝携帯で誰かと話しながら、首もまだ据わらぬ子どもをまるで物を扱うようにホイと渡す母親、コーラのペットボトルを片手に登園する1歳児など、目が点になる現実がそこそこありました。子どもの最善の利益とは何かという問題を常に突きつけられながら、先生方はその対応を迫られます。朝ご飯をお弁当で持たせる保護者がいれば、その子のために食事スペースを

つくり、周りの子がその子を特別視しないように配慮します。そしてどの子どもも持っている発達する可能性を最大限に引き出せるよう、質の高い遊び環境を構成し、子どもたちを導いていくのです。

先日、認定こども園改正法案が参議院を通過しました。今後、ますます幼保一体化が進められていくでしょう。幼稚園には幼稚園の良さがあり、また難しさがあります。幼稚園／保育所それぞれの特色と課題を見据え、子どもの最善の利益とよりよい発達保障のために、何を守り、何をつくらねばならないか。現場の問題意識に近いところで研究し、実践力ある教員養成につなげていきたいと、心新たに思っています。

回り道のあと

京都教育大学附属特別支援学校高等部 講師 **富田 紀子**
(美術専攻 平成13年度卒業生)

卒業してはや10年。

在学中、特に4回生の1年間は、陶芸の制作に打ち込んだ毎日だった。後期は、家にいる時間よりも大学にいる時間のほうが長かったのではないだろうか。とても充実した毎日だった。

卒業後は、陶芸関係の仕事をしたり、高校で講師をしたり、学童保育で働いたりした。学生の時に大学にこもっていた反動だろうか、いろいろな世界を見てみたい気持ちが強くなり、仕事を辞めたことをきっかけに、バックパックを担いで一人で旅をするようになった。旅の間に出会う人たちに、「日本はどんな国？」と聞かれて、あまり日本のことを知らない自分に気づき、日本のことを知りたくなると、スクーターにキャンプ道具を積んで日本中を旅した。2年半あまりの旅

のなかで、よかったと思うことは、たくさんの今まで知らなかったものが見られたこと、旅をしなければ出会えなかったような人たちに出会えたことだ。

今の仕事に就くまでに、たくさんの回り道をしている。今もまだ、この道が一本道なのかどうか分からない。しかし、この回り道も、無駄ではなかったと思う。大学で学んだことやいろいろな仕事の経験は、今の支援学校の仕事に生きている。旅で得た経験は、自分自身の視野を広げるのに役立っている。もちろん、社会に出てからずっと働いている同年代の先生に比べると、知識や経験が少なく、教えてもらうことばかりであるが。今は、周りの先生方から学びながら、生徒たちとともに成長していけたらいいなと思う。

笑顔をおれずに

亀岡市立千代川小学校 教諭 **濱田 薫**
(社会領域専攻 平成23年度卒業生)

教師生活1年目の1学期が終わりました。私は3回生の後期から実地演習等でお世話になった小学校に勤務しています。学生から教師という立場に変わり、改めて教師という仕事の大変さや責任、そして、おもしろさや喜びを知ることが出来た3ヶ月半でした。

4月、大きなランリュックを背負い、少し緊張した面持ちで入学してきた子ども達に出会いました。29人の子ども達と毎日楽しく過ごしています。京都教育大学には、たくさんの実地演習の授業があります。その機会に、様々な子ども達と接してきたことで例えば、授業中に立ち歩いてしまう子どもに対しても落ち着いて対応することが出来ています。しかし、その中で学級経営や生徒指導の難しさを痛感し、悩んだり、涙ぐんだりすることもあります。そんな時は、周りの

先生方に相談にのっていただき、助けていただいています。このように、実際に教師になってみなければ分からないことも多くありますが、大学時代に現場に入って学ばせていただいたことは、今の私の教師生活にとっても役立っていると思います。

教師の仕事の一番の喜びは、日々成長する子どもの姿を間近で見られることだと思います。入学当初は、他人のことには無関心だった子どもが友達の手伝いをしたり、友達と一緒に頑張ったりしている姿を見ると、成長したなと感じます。

1学期は、分からないことだらけで余裕もなく、あっという間に終わってしまいました。2学期は、笑顔をおれずに、子ども達との生活をもっともっと楽しみたいと思っています。

花と緑の美しい学園への提言

京都教育大学名誉教授 田 淵 春 三

◇すばらしい野外博物館構想

大学正門前には野外博物館への入場歓迎の表示があり、門衛所では美しいパンフレットが配布される。学内に歩を進めるとケヤキ、メタセコイアの並木、点在するクスノキの巨木をはじめ多彩な木々の緑に覆い尽くされ、それは見事だ。今回いくつかの大学のキャンパスを訪ねた。いずれもほぼ開放状態だったが、本学ほど積極的に受け入れる所は無く、社会に開かれた秀れた制度の一つとして高く評価できる。

◇美しい花と緑のキャンパスへ

しかし、野外博物館としては道半ばといったところか。説明板は地学分野に片寄り、何よりも個々の木のラベルが未整備だ。また、広域の手付かずの自然^{ぼっこ}にクズがわがもの顔に跋扈し、狐狸の類い出没の報もありなんの状態である。'09年3月の産技科同窓会誌に某君は「こんなことでどうする。大学全体が草だらけ、中略 母校はいつ潰れてもおかしくない」と寄稿した。似た状態の小学校を前にある会社員は「こんな会社とは絶対取引しない。潰れるに決まっているから」と。何かすきとせず、美しく無いといってもいい。釈迦に説法で恐縮だが美とは「細部まできれいに整っている様」であり、漆原美代子さんは「生きるための技術、良く生きるための条件」とし、藤原正彦氏は「子供がいつも美しいものに触れている、あるいはそれに憧憬をもち続けることは本当の国の底力に、そして品格につながる」という。重く受け止めるべき言葉であろう。



本誌129号に岩村先生は「植栽計画の策定に取り組んでおり、学内の森をより美しいひとつの景観として発展させたい」と記しておられる。これに期待を寄せるものだが、私見を述べ参考に供したい。

◇わたしの提言

美しい花と緑のキャンパスづくりの要訣は、充実した「管理」にあり、そのためには確たる全体計画と限りある予算、労力への配慮が重要である。

地割りにより労力を要する造園区と最低の管理で済ます自然（観察）区に大別する。前者は出入り口付近と建物の周辺の一部及び主要道路の一部とし、残りを自然区とする。造園区は庭園的な植栽をして十分な管理をする。ここでは小面積でも周年美しい花壇の経営が望まれる。自然区は植生の遷移の観察を除いて、外部に迷惑をかけぬこと、森の美観を損ねない程度に最低の管理をする。写真は第二学舎の道路に面した今年5月の植生であるが、クズとヤナギの文字どおりの葛藤を学習できる絶好の場である。

管理の担い手としてまず学内の造園、植物、園芸の専門家を含む学科代表と事務担当者で委員会を構成し緑地管理の計画、立案、施行を統括する。

作業の当事者はまず大学の構成員によるものとし、年数回の環境デーを設け全学挙げて草刈りなどを行う他、既に実施されている「造園」、「花壇管理」のように講義のなかに位置づけられているものはさらに拡充していただき、園芸部といった学生のクラブ活動も期待される。外部の人たちによるものでは地域の老人によるボランティア活動があげられる。定年後のライフスタイルとしてボランティアが最重要視され、内容は清掃と園芸が最適と言う。その際、少しでも環境、植物、園芸などの学習への配慮が大切であろう。危険な作業、専門的な機器を要する作業などは当然ながら造園業者に依らねばならない。

教育大学であるが故に学生さんによる美しい花と緑の学園づくりが肝要で、頭だけの環境教育は大抵ろくなことはなく、感覚と筋肉をとおして体得した理解、能力こそが本物だと確信している。

「学びの森ミュージアム」周辺の立派な緑地整備を目のあたりにしながら今後の発展が楽しみだ。

第 130 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

130 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 130 号をお届けいたします。本号の特集は『京都教育大学東日本大震災復興支援活動報告』と『大学会館改修・改築工事について』の二本立てです。

本学では、東日本大震災復興支援活動として様々な取り組みを行っております。一つ目の特集では、その活動の中から、

1) 福島県在住の高校生の現状と想いを伝えるとともに、京都地域で可能な東日本大震災の長期的な支援について地域の方々と一緒に考えることを目的として本学が企画しました主催事業「耳をすませば」の活動報告

2) 宮城県の中学校にて実施されました宮城教育大学主催の「学校支援ボランティア活動」に参加した本学学生の活動報告

を取り上げました。

また、2 つ目の特集では、平成 24 年 9 月末に改修・改築工事が完了したばかりの本学大学会館について、各部屋の写真とあわせてご紹介しました。

なお、今号の表紙を飾るのは附属幼稚園の安井綾花さんと鍋島優宏さんの作品、裏表紙は同じく附属幼稚園の吉田名亜里さんの作品です。それぞれの元気溢れる作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀				
副委員長	丹下 裕史				
委員	齋藤 正治	西村佐彩子	吉江 崇	相澤 雅文	
	平井 恭子	Andrew Obermeier	丸山 啓史	富家 健治	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第130号

発行日
2012年10月19日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>